

特集：矢作川環境誌としての枝下用水史

## 枝下用水を生きる－「ある農家の日記」から－

Living with Shidare Yousui: Reading diary of a certain farmer

達 志保

Shiho TSUJI

### 要 約

本稿は、昭和37（1962）年の愛知県豊田市の農家の青年の日記から、1年の農家の多様な農作業と暮らしの詳細を捉え、日本におけるこの時期、この地方の農家経営、農業経営の特質を明らかにすることを目的とした。昭和37年は高度経済成長の中にあり、農工間の所得格差が年々大きくなっていく時期である。日本の農家の多くはその格差を埋めるために兼業化を進めていった。ここでとりあげる豊田市の場合、ごく近くにある大企業への通勤兼業が可能な環境にあったため、非常に速い速度で兼業化率をあげていった。

昭和37年という時代状況の中で書かれた日記から見えてくるのは、農の営みをめぐるワタクシとオオヤケの分離と連結という問題である。それは決して個人の問題ではなく、高度経済成長という一大国家プロジェクトに農業経営が組みこまれていく姿でもある。高度経済成長が生み出す生活者意識の中で、農家経営＝農業経営というこれまでの規範に葛藤する姿が日記からは見えてくる。そのため本稿ではイエ事とクニ事とその中間項としてのムラ事という枠組を設定した。

兼業化を支えるために農業労働そのものがこの後軽減されていくことになるが、ある農家の日記は昭和37年の農家経営の揺れる姿とともに農業技術、圃場の整備、水の管理など大きく動き始める直前の状況としても読み取ることが出来るのである。

キーワード：枝下用水、高度経済成長、農業兼業化、農家経営、日記

### 1, はじめに

本稿の目的は、昭和37（1962）年の愛知県豊田市の「ある農家の日記」から1年の農家の暮らしの詳細を捉え、日本の農業におけるこの時期、この地方の農家経営の特質を明らかにすることにある。「ある農家の日記」とは、枝下用水受益地である愛知県豊田市下林<sup>しもばやし</sup>町の農家9代目のT氏の昭和37年の『農家日記』である。

農業といえば稲作と思われがちだが、稲作だけをしている農家は希で、麦や野菜も作り、季節毎に養蚕を行い、その合間に畜産も手がけるという具合に、稲作は多様な農業経営の一部分にすぎない。しかもすべての農作業は、常に天候に左右されている。農業ほど天候が関係する仕事はあるまい。たとえ賃労働に出た日であっても、日々の日記が大抵天気から書き始められるのは、天気に大きく左右された日々を暮らしてきたからにほかならない。

T氏は日記の中で、農作業の記録だけでなく、自分自身がおかれている状況を振りかえり、思いを吐露している。昭和37年といえば、日本国中で工業化が進み、高度経済成長による労働力需要が急激に伸びて都市への人口集中に伴って、農家戸数が急減し始める時期である。昭和40（1965）年の総農家数比（対昭和35年）を全国と豊田市とで比較してみると、全国が94%に対して、豊田市では95%であり、ほぼ同じ減少傾向を示している（2010年世界農林業センサス）。しかし、トヨタ自動車株式会社という巨大企業のあるこの地域の農家戸数減少率が全国平均並みとは、どういうことだろうか。

全国の総農家数の詳細を見ておこう。専業農家の数が昭和35（1960）年には2,078千戸で総農家数の34.3%であったのが、昭和45（1970）年には831千戸で15.6%と激減していることがわかる。その上での総農家数の緩やかな減少は、その分兼業化が著しく進んでいることでもある。

兼業農家についてみて見ると、世帯員の中に兼業従事者が1人以上おり、かつ農業所得が兼業所得よりも多い第1種兼業農家の総農家数に対する割合は、昭和35年には33.6%だったのに対して、昭和45年には33.7%とほとんど変化がないが、兼業所得が農業所得よりも多い第2種兼業農家は32.1%から50.7%と総農家数の半数を超えている（2010年世界農林業センサス）。つまり兼業農家によって総農家戸数の減少が押えられてきただけでなく、日本の農家の多くが農家と勤労者世帯との所得格差を埋めていくために、農業を続けながらもより農業以外での所得の多い兼業農家を選択していったことがわかるのである。

これが当時の日本の農業経営の大きな流れであったが、豊田市の場合、昭和35年の兼業農家数が総農家数の72.4%から昭和40年の91.3%へと、全国では昭和35年からの10年間で見られる変化を、5年間で見せている。第1種兼業農家の総農家数に対する割合についても、昭和35年には38.0%であったのが、昭和40年には36.6%と減り、第2種兼業農家は34.4%から54.7%と150%をこえる伸び率であった（2010年世界農林業センサス）。このことから兼業化がごく近くにある大企業への通勤兼業によって支えられていたことが理解でき、昭和37年のこの地域の農業経営のあり方をおおきく規定することになったと予想される。各農家は兼業化しながら、農家経営を維持するためにどのような工夫をしていたのだろうか。用水を含めどのように施設の変更をしていたのだろうか。

昭和37年という時代状況において書かれた日記から本稿が見ようとしているものは、農の営みをめぐるワタクシとオオヤケの分離と連結という問題である。日記という媒体でありながら、そこに記されているのは個人の悩みや問題のみに終始しているわけではなく、戦後日本の農業経営の大きな転換や産業構造の変化、高度経済成長という一大国家プロジェクトに農業経営が組み込まれていく姿をもつぶさに明らかにすることができるはずである。

そのために以下では、イエ事とクニ事、そしてその中間項としてのムラ事という枠組を設定したい。日記の書き手がいかにして一戸前の戸主＝家長となりイエ経営を成功させていくかという問題関心が、クニ事である労働市場の再編や経済政策の変化に関連し、双方が矛盾をはらみつつも進展していくダイナミズムは、いかに一農家の生活実態にあらわれるのか。さらに、両者が乖離し、書き手も身の立たせ方に当惑する局面において、ムラ事

が両者の仲立ちとなるような働きをしていると考えることはできないだろうか。すなわち、開削者祭祀の主体となり旧来の生活意識を充足させる拠り所として意義づけられるムラ事は、同時に、農業政策にかかわる国家エージェントとして、その受け皿としても重要性を帯びていたという両義性を読みとることができないだろうか。

このような問題意識のもと、以下では枝下用水に直接関わるある農家の稲作やその他の耕作を農作業の内容で分類し、農業の機械化の実際や農業をしながら賃労働に出ていく枝下用水受益地の農家経営の姿を日記から読みとっていくことにしよう。

## 2, 「ある農家の日記」の昭和37年

先に本稿で取り上げる昭和37年という時期の農業について記しておこう。昭和30年代は、神武景気や岩戸景気を経て、自動車・電気機器・石油化学工業といった新鋭の重化学工業を基軸とするそれまで以上の高度経済成長とG A T T体制下の国際市場への参画が本格化し、日本が他の欧米諸国にも例を見ない高度な経済成長を実現した時期でもあった。

昭和37年は、積極的な成長政策を展開し、雇用の拡大と完全雇用、国民所得の増大を目指した最初の全国総合開発計画が動き出した年である。その前年、昭和36（1961）年にはこうした流れの中で日本の農業も農家と勤労者世帯との所得や消費水準の格差を克服するため、近代化と産業的自立が求められ、農政の基本理念を盛り込んだ農業基本法が制定された。その後、過疎・過密問題や公害問題など高度経済成長の歪みとしての問題が浮上してくることになるが、昭和37年はそうした問題がまだ社会問題化する前の時期にあたる。

その後、農家の抱える問題として「三ちゃん農業」と言われる労働形態が取り上げられ、昭和38（1963）年には流行語にもなるが、日記を通して一人の青年が農業と通勤労働の間で思い悩む姿を知ること、決して残された家族の農業だけが問題ではないことも明らかになるだろう。

本稿で取り上げる「ある農家」とは、愛知県豊田市下林町の農家である。下林町は豊田市駅（当時は挙母駅）の南、かつては農家34戸であったが、その後都市計画に従って道路が改修され、店が並び、マンションが立ち、現在の下林町には838戸が暮らしている（2013年2月現在）。

昭和15（1940）年、T氏は下林で農業を営む9代目と

して生まれた。姉がいたが3歳で亡くなり、T氏が3歳の昭和18（1943）年、父は召集され、翌年戦死した。そのため、T氏は父の顔を覚えていない。隣接する金谷地区のK氏は、戦中に学生で列を作り、順々に戦死した兵士の遺族の家へ挨拶に出かけた際、T氏の家の前に「殉国兵士の家」という札がつけられ、幼いT氏が家の前に立っていたことを覚えている。

父は享年32歳、働き盛りであった。跡継ぎを失った祖父からは、繰り返し家業を継ぐのはT氏だと言いきかせられたという。実際、人手のない一家を支えるため、T氏は農作業ではまだ役立たない小学校3年生の頃から台所に立ったという。田で祖父母が人を頼んでやっていると「おやつを焼いてこい」と言われ、3時頃にだら焼き<sup>1)</sup>を持っていったこともあった。5・6年生になると家事はすべてT氏がやるようになり、暗くなると帰ってくる家族のために家で夕食の支度をしたり、家の中を掃除したりとなんでもやったという。兄弟はいなかったが、父には12人の弟妹がいたため、叔父・叔母で自分の兄姉くらいの年近い年齢の者もあり、繁忙期の人手のいる時にはその親戚が支えてくれたという<sup>2)</sup>。

昭和37年の日記の中で、労働力として日常的に登場するのは、T氏、母、祖父の3人である。祖母は昭和9（1934）年に亡くなっている。父の弟2人も戦死しており、繁忙期に助っ人として登場するのは叔母たちである。この地域は地域内の助け合いというより、親戚間の助け合いで農業を続けてきた。

昭和37年当時、この農家は1町2反（約1.2ha）の田を所有していた。釜洞<sup>かまぼら</sup>3反、柳田<sup>やなぎだ</sup>2反、他7ヶ所に1反ずつ。畑は他に3反程あった。昭和11年のT氏の父の『当用日記』の頃は、1町5反の田を所有していたというから、水田は3反減っている。

昭和37年は前年に農業基本法が制定され、日本の農業が大きく変わろうとしていた時期である。時代の変化を確認するため、本稿では昭和11（1936）年の父の日記にも注目していきたい。

昭和36年の農業基本法の施行により、これまでの農業は変わるのだ、変わらなくてはならないのだというふれこみが様々な場面であったことだろう。昭和37年1月に発行された月刊誌『農業あいち』<sup>3)</sup>の昭和37年1月号巻頭特集は「今年の経営設計」であり、「今月は農業基本法が生まれてから初めて迎えた正月です。これからの農業の進むべき方向は、基本法にあるように、農業の生産性を向上し、他産業の従事者となり合いのとれた生活ができるような農業所得をあげる農業を営むことにあ

るといえます」（愛知農業普及協会、1962）という挨拶で始まる。自分たちの農業経営が基本法をきっかけに変わらなくてはならないという呼びかけがあちこちで起きていた。

### 3、ある農家の昭和37年の農作業と賃労働

昭和37年の『農家日記』は「新しいうちは書くけど、お盆時分になると書いてない」<sup>4)</sup>というT氏が、年の終わりまで書き続けた日記である。この年はT氏にとって特別な年であった。昭和37年、戸主は祖父のようだが、T氏には婚約者が居り、間もなく一戸前になるという時であった。「今年は少し家の経済を上手に進めたい」（1月1日）、「昨年のように、自分勝手な行動は許されなくなっ」た（1月2日）と決意を見せている。

本章では、昭和37年の『農家日記』を農作業の内容で分類し、「昭和37年の『農家日記』に見る農作業一覧表」（表）<sup>5)</sup>とした。

農作業一覧表を見てわかるように、農事は多様であり、分散している耕地を時間を工面しながら、午前・午後・夕方と移動し、様々な作物を育てている。しかしT氏は農作業だけでなく賃労働にも出かけて行く。本章では、日記から昭和37年の農作業と賃労働を、月毎に読み進めていきたい。

#### ① 1月

1月4日、母は「養蚕組合で伊勢参り」、H氏は「O社の仕事に行った」と記している。T氏は賃労働を「O社の仕事」・「O様の仕事」<sup>6)</sup>と表現している。

年明けの農作業は1月5日の古瀬間<sup>こせま</sup>へのハザ竹取りから始まる。古瀬間は矢作川の対岸で、叔母の家があった。竹の運搬に耕耘機が使われている。T氏が「足がおそい」と不満を記しているのは、既に自動車の便利さを知っているからである。

6日には「夜自動車の練習に行く」と記している。大型自動車のことである。隣の高岡村では、役場が負担して自動車の免許を取らせたという話もあるように<sup>7)</sup>、運転免許はワタクシ事だが、工場誘致を成功させるムラ事でもあった。

T氏のO社での仕事は側溝作りや自動車での残土運搬であり、「毎日々務めに出る事はなかなかつらい」（1月12日）、「毎日土方仕事なので体がくたびれる」（1月13日）と不満を覗かせる。牛に餌をやってから仕事に行くため、朝も早い。それでもあとの農作業を母が担ってい

表 昭和37年の『農家日記』に見る農作業一覧表（作表にあわせ、文意を変えない形で書き換えを行ったところもある）

月	米	麦	サツマイモ	豆類・ その他野菜	養蚕	家畜
1月	5日 古瀬間へハザ竹取り。耕耘機は足が遅く、手間どった。竹運搬4時間。動力運搬3時間。 14日 午前中山の手の稲葉を運ぶ。 15日 午後から母と2人で水門先の藁をかたづけ。藁運搬3時間。母藁運搬3時間。動力トレーラー 2時間。	24日 田麦施肥温床整理 施肥30分。				6日 何時もは牛に餌をやって行くだけのが色々な事をしなければならぬので母のありがたみがつくづく思える。
2月	21日 午前中に天白の藁運搬。午後からも2車。夕方から温床を半分踏み込んだ。 22日 今年になって初めて家に居て仕事をする。午前中に天白の藁運搬。午後からも2車。夕方から温床を半分踏みこんだ。					4日 牛のえさやり。
3月	2日 今日は仕事を休んで水門先の除草にあたった。 3日 天気も良いので藁はよく乾き切っているので、今朝は午前中に横枕に、ドブのこりの藁を運んだ。 31日 今月も終ると中植の苗代の準備をせねばならないので早かと思ったが苗代を耕耘機で碎土して来た。午後からも普通植えの苗代にロータリーをかけておいた。			20日 西瓜播種。		20日 朝から小雨が降り続いて居たので仕事は休みであるので今日は家で牛小屋を作りはじめた。1日かかっても大工仕事は仲々出来ない。 22日 夜は牛小屋作りで10時迄。
4月	6日 午後、半五郎様の田打ちに行った。田打ち2時間。 11日 仕事を休んで種蒔をした。今年はロータリーを作ったので蒔くに楽であった。四時頃より頼まれた田打ちをした。苗代作り3時間。播種4時間。田打ち。畜力田打ち2時間。 14日 半五郎様の沢田の田打ち。田打ち1.3時間。動力田打ち1.3時間。 15日 小生午前中田打ち。田打ち3時間。 27日 1日古瀬間の叔母の家の田打ち作業。耕耘機を持って行ったが、田が小さくてアゼが曲っているので耕しにくかった。1日かかって耕しても1.5反位しか耕せなかった。 28日 堆肥を寿町、横枕、角連寺へ各ター車ずつ運ぶ。 29日 午前中苗代の準備。午後からは角連寺の田打ち。小さい田ばかりなのでくたびれる。田打ち5時間。苗代アゼ塗り3時間。 30日 沢田近所の細かい田を全部かたづけるつもりであったが朝からスキをこわしてしまった。その為にドンドンの下が少し残ってしまった。午後からは中で耕しかけた。田打ち5時間。					1日 夕方遅くから牛のつめ切り。 6日 1度やってみたくて居た豚飼が今日より始った。午前中は市場。午後方家に持って来たので馬屋のあたりのかたづけ。
5月	2日 釜洞があまりに柔らかくスキでは調子が悪く、横枕を耕す。田打ち5時間。母苗代整地5時間。 3日 母と2人で山の手の田打ち田が小さいので牛で耕した。水のある田は牛の方が楽である。H田打ち6時間。母田打ち6時間。畜力田打ち6時間。 6日 天白だけ打つ予定であったが草が多く、草刈り。 7日 母と2人で苗代を作った。午前中角連寺の苗代へ播種。午後からは沢田の苗代の整地。五時頃よりドブのレンゲを一車持って来た。 8日 天白の田打ち。草が多く半分しか出来なかった。田打ち8時間。動力田打ち8時間。		16日 サツマサシ 1時間	9日 午前中は新切へ行って盆アズキを播種。	8日 今日蚕の掃立て、その為母は西山の飼育場に行った。	

月	米	麦	サツマイモ	豆類・その他野菜	養蚕	家畜
5月	<p>9日 母と2人で角連寺へ水苗代を作った。</p> <p>10日 ドブの田打ちの残り、と苗代の不足分に播種。田打ち6時間。</p> <p>11日 午前中に角連寺の田打ちの端耕し、午後からはドンドン・天白の端耕し。ロータリを作って居って、水田車輪でひっかけてしまった。田打ち3時間。</p> <p>13日 釜洞の田打ち。</p> <p>14日 釜洞アゼ塗り。砂が入り、田が小さくなっていく。土を出し下の田2枚アゼ塗り。アゼ塗り6時間。</p> <p>15日 天白の畑のアゼ草めくり。</p> <p>16日 釜洞アゼ塗り。大雨が降る度に雨水が全部水路へ集る。家の田は満水、山田へ。アゼ塗り6時間。</p> <p>17日 山田（山の手）のアゼ塗り作業。下田は全部高低を直した。アゼ塗り8時間。</p> <p>18日 天白の田打ちの残り、ドンドンの残りを全部終えた。これで今年は全部済んだ。田打ち2時間。</p> <p>19日 午前中耕耘機の使用。半五郎様の碎土と柳田の二オの跡のスキ耕し。午後から沢田ドンドンのアゼ皮めくり。アゼ皮削り4時間。</p> <p>20日 毎日田の方の仕事。アゼ皮メクリ6時間。</p> <p>21日 横枕のアゼ塗り。アゼ塗り3時間。場ならし2時間。</p> <p>22日 機械で出来ると言う頭がある精かまだアゼ塗り。場ならしだけである。角連寺アゼ塗り4時間。その他3時間。</p> <p>23日 釜洞へ整地に行った。今年初めての機械であるので思ったより仕事が出来なかった。整地6時間。</p> <p>24日 3人を頼み釜洞と山の手田植。小生山の手整地。母を加えて4人なので5時頃より山の手へ来て下の田の大半を植えた。田植4人36時間。整地6時間。草刈3時間。動力整地。運搬4時間。</p> <p>25日 2人で昨日の残りの田植え。3時頃より角連寺西側を植えた。田植2人10時間。動力整地。運搬2時間。</p> <p>27日 夕方、沢田の三角田に植えた。田植1時間。</p> <p>28日 ドンドンの道西側と桑畑東側。沢田の苗代残り、沢田の桑畑下のアゼ土を粘った。アゼ塗り4時間。</p> <p>31日 午前中田んぼの仕事、ドンドンと沢田のアゼ塗り。</p>		<p>23日 夕方から新切の畑へさつまさし。さつまさし2時間。</p>	<p>19日 西瓜が調子が悪く沢田だけ。</p>	<p>12日 今夜も祖父は昨日蚕の共同飼育に出て今朝帰る予定。</p> <p>13日 母は西山に蚕の世話。</p> <p>15日 今朝蚕が来て午前中は蚕を手伝う。</p> <p>20日 母は蚕の飼育。</p> <p>21日 4時から蚕も大きくなったので桑運び。桑つみ2時間。</p> <p>26日 蚕の手伝い。裏へ柵を作った。柵作り3時間。桑切り2時間。</p> <p>27日 蚕の手伝い。蚕手伝い3時間。</p> <p>28日 蚕も手伝う。蚕2時間。</p> <p>29日 蚕手伝い。蚕8時間。</p> <p>30日 蚕手伝い6時間。</p>	
6月	<p>1日 釜洞、山の手PCP散布。PCP2時間。</p> <p>6日 午後からアゼ塗り。アゼ塗り5時間。</p> <p>8日 ドブに水がつき、アゼ塗り。草が多く、ロータリをかけた。ドンドンの下の田も水があり塗った。アゼ塗り5時間。ローターかけ3時間。動力3時間。</p> <p>9日 午後からアゼ草刈りに行った。アゼ草刈り4時間。</p> <p>11日 午後から沢田の田植4時間。動力整地運搬3時間。</p> <p>12日 ドンドン田植3人27時間。動力整地4時間。</p> <p>13日 里の田等水が増し、午前予定外の仕事。午後ドブ整地、5時頃より角連寺の県道沼の小さい田、半五郎様の2番耕し。整地3時間。苗取り2人11時間。2番耕し3時間。動力2時間。畜力3時間。</p> <p>14日 ドブは水多く植えないので角連寺を整地、植えた。整地2時間。田植3人14時間。苗取り2時間。動力2時間。</p> <p>15日 3人でドブ田植え。1日中腰を曲げて居ると夕方にはどうにもならない。3人で2反が精一杯。田植3人27時間。</p> <p>16日 午前中沢田の苗代整地。午後天白の整地。耕耘機での整地はコツがあるが、ローターをかけているので手間どる。整地5時間。田植え沢田2人3時間。</p>	<p>5日 午後からは麦刈り。3時間。</p> <p>6日 午前中母と2人で天白の麦刈り。午後からは母1人で。大麦刈り12時間。</p> <p>16日 麦、運搬6時間。</p> <p>17日 畑の裸麦の脱穀。麦脱穀3人12時間。運搬3人3時間。</p> <p>19日 柳田麦刈り3人28時間。</p> <p>20日 昼から半分柳田麦刈り、脱穀。</p>	<p>5日 4時頃より新切へサツマさし。</p> <p>26日 イモサシ5畝4人6時間。動力、場作り1時間。</p> <p>27日 午後からはサツマイモさし。イモサシ4時間。</p>	<p>29日 母は野菜の手入れ。</p>	<p>1日 蚕5時間。</p> <p>2日 蚕上簇5人35時間。</p> <p>3日 上簇5人35時間。</p> <p>4日 午前中蚕上簇。</p> <p>9日 昼迄は繭かき。</p> <p>10日 繭の残りのかたづけ。</p> <p>11日 春蚕繭渡し半日。春蚕取繭量 110kg</p> <p>30日 母は麦畑跡の除草並に桑園の除草。母 除草8時間。</p>	<p>10日 牛の床の取りかえ。</p> <p>16日 豚の床換え。</p>

月	米	麦	サツマイモ	豆類・その他野菜	養蚕	家畜
6月	<p>18日 田の方に水がなくなり始末が悪い。手を怪我し、田植を左手でしたが思う様に出来ない。天白、田植。</p> <p>19日 9時半頃迄除草剤を散布。2時間。</p> <p>20日 今朝、半五郎様の水田の整地をした。</p> <p>22日 午後田打ち。母と祖父苗取り。田打ち6時間。アゼ塗り2時間。祖父水田整理5時間。母アゼ草刈5時間。堆肥施し。草取り10時間。動力田打ち5時間。</p> <p>23日 柳田の田植。小生は整地。母と祖父は田植。整地10時間。田植20時間。動力6時間。</p> <p>24日 柳田田植終了。午後横枕整地。母と祖父苗取り。田植(3)18時間。整地4時間。除草剤散布1時間。動力4時間。</p> <p>25日 村の叔母が手伝って、横枕の田植と苗代を水門先の分を残して植えた。</p> <p>29日 水門先は今年も水が無く今も植付け出来ず、田にかりきり。耕ウン3時間。堆肥施肥4時間。その他2時間。</p> <p>30日 水が無く植付け出来ず、水稻管理作業。柳田、横枕PCP散布。午後から早植えのメイ虫駆除。消毒 3時間。PCP散布2時間。</p>	<p>21日 脱穀の残りをかたづけた。午後からはカヤを桑畑に配った。柳田の麦だけで16畝。脱穀2時間。カヤ運搬4時間。動力耕3時間。農発2時間。</p> <p>22日 家中で柳田の麦田の後始末。</p> <p>26日 新切の麦刈り。麦刈り4人36時間。</p> <p>27日 新切の麦午前中に脱穀を終える。5時頃より水門先の麦刈り。脱穀(3)8時間。麦刈(2)3時間。動力農発2時間。耕1時間。</p> <p>28日 麦の取り入れを終えた。麦刈4人16時間。脱穀4人8時間。その他3人6時間。</p> <p>30日 母は麦畑跡の除草。桑園の除草。母除草8時間。</p>				
7月	<p>1日 昨夜からの雨で午前中水を引入れ水門先アゼを塗り、午後整地。母苗取り。アゼ塗り3時間。整地3時間。苗取り1時間。母苗取り4時間。</p> <p>2日 雨の中、水門先の田植と苗代を植えた。今日で今年の田植も終り一段落した。田植3人17時間。</p> <p>10日 屋迄新切のカヤ敷。午後山の手堤の草刈り、ヒエ抜き。草刈り3人12時間。除草2人2時間。その他3人1時間。</p> <p>11日 2、3日のうちに稲のメイ虫も急速に広がった。朝山の手除草。後天白、ドブの消毒する。消毒7時間。除草2人4時間。その他2時間。</p> <p>12日 消毒。毎日噴霧機を使っていると嫌になる。天白と柳田・沢田の稲が肥不足。消毒8時間。母除草8時間。</p> <p>13日 消毒。今年は稲に肥の効きめが悪く株が増加しないので、柳田に化成を2桶施肥。消毒4時間。</p> <p>14日 角連寺早植施肥。1廻りメイ虫消毒終えた。稲の生育状態はあまり芳しくなく作りにくい様である。</p> <p>15日 夕方、沢田の堤の草刈り作業をした。</p> <p>16日 ドブのアゼ草刈り、水門先のヒエ抜き。</p> <p>19日 母はアゼ草刈り。</p> <p>21日 新切も草大きく、母と共に1日除草。除草16時間。</p> <p>25日 家に来てから沢田の稲に消毒。</p> <p>30日 稲の元肥が多ったせいか色がさめず心配になって来た。屋から水稻の水切り、尿のくみとりをした。</p> <p>31日 母は屋の間をみては田草とり。</p>	<p>15日 麦の貯蔵。</p> <p>25日 大麦の選別。</p>	<p>3日 サツマイモ手入れ18時間。サツマイモネ立2時間。動力2時間。</p> <p>8日 イモサン2人2時間。</p>	<p>7日 アゼ豆半日かかって3人で蒔く。午後からは天白とドンドンの畑豆をまく。豆蒔き3人24時間。</p> <p>10日 豆蒔き。</p> <p>17日 仕事から帰ってから天白の大豆のかたわり。</p>	<p>6日 母と2人で桑園の手入れ。麦藁を敷いた。昼前に秋屋さん、午後からはドンドン、角連寺。母麦藁敷き16時間。</p> <p>8日 沢田の桑畑の除草。麦藁敷き。除草2人16時間。</p> <p>9日 新切の桑畑へ除草。除草3人24時間。</p> <p>10日 麦ワラ敷2人6時間。</p>	
8月	<p>1日 ドブが思ったより草が多くてビックリした。2.4D散布。アゼ草刈り。</p> <p>3日 家に帰り雨もやんだので柳田のアゼ草を刈った。</p> <p>4日 横枕アゼ草刈り</p> <p>5日 今年稲は思うように出来ない。横枕へ珪カル施肥と2.4D散布。午後山の手穂肥と釜洞アゼ草刈り。</p>		<p>20日 新切の芋畑の除草。</p>	<p>27日 秋野菜の播種。</p>	<p>10日 蚕が五令に入り手伝い。</p> <p>11日 蚕に1日中つききり。桑を摘んだ後給桑。</p>	<p>2日 家に帰ってから牛の床換えをした。</p>

月	米	麦	サツマイモ	豆類・その他野菜	養蚕	家畜
8月	<p>10日 本日ドブの田の水揚水を行った。</p> <p>12日 稲は肥の時期に成り、体がいくつあっても足りない。今日は昼休みもせず柳田の穂肥をやった。</p> <p>16日 蚕の間を利用して山田の追肥に行ってきた。</p> <p>18日 消毒をしながら田を廻る。消毒は粉剤ホリドールシンメル。</p> <p>19日 午後からは昨日の消毒の続き。</p> <p>21日 午前中沢田のアゼ草刈り。</p> <p>22日 アゼ草刈り。</p> <p>24日 長い間雨も降らず里の田は白くなって居るので、今日は従兄弟と一緒に道具をかりて来て揚水をした。今度は周囲のものに話をしてやった。</p> <p>29日 母と2人でアゼ草刈り。アゼ草はよくのびる。</p> <p>31日 ここで手を抜かず、もう1度消毒。稲作は角連寺を除いて順調。角連寺はイシユク病が出て見難い。</p>			<p>30日 午前中天白の西瓜の跡の大根蒔き。</p>	<p>12日 新切の桑摘み。</p> <p>13日 朝桑換え。</p> <p>15日 午後からは桑摘みに一苦労。</p> <p>16日 蚕手伝い。拾い給桑。</p> <p>17日 朝晩は涼しく平均今年の夏はしのぎやすかった。その精か蚕も遅れて居て今日上簇である。S様も昨夜は泊って今日も手伝ってもらった。</p> <p>22日 母は午後から繭かき。</p> <p>23日 蚕も後2, 3日で終るが人間の方がバテ出した。桑の成育が悪く桑の不足で心配。夜になって明日の分が出来たので安心した。</p>	
9月	<p>1日 アゼの草は知らぬ間にのびているので、午前中母と山の手に行った。午後からは小生山田の消毒。</p> <p>3日 午後からは消毒の残りをかたづけた。</p> <p>4日 午前中は稲の実肥を施した。</p> <p>5日 午後稲の実肥と横枕、山の手、柳田、角連寺に施す。</p> <p>7日 今年も稲の作柄は大体決った様なものである。田一面を見ると穂は良いように見えるが、中へ入って見ると肥が少なかった様である。</p> <p>8日 雨が降ったり止んだりして居たので縄をなった。</p> <p>9日 午後からヒエ抜き。水門先の田に多く驚いた。</p> <p>10日 ヒエ抜きも全部終了。</p> <p>13日 昨日に続き、スガイナイ。</p> <p>19日 山の手ヒエ切り。昨年よりヒエが多い。</p> <p>30日 縄をなった。</p>			<p>11日 大根の割返し。</p> <p>27日 昼から新切へ大根の施肥。</p> <p>28日 昼前小生飼料の加工。午後から大根の手入れ。</p>	<p>1日 祖父と母は蚕の講和。</p> <p>4日 晩秋蚕掃立 25(g)。</p> <p>12日 桑畑の野良仕事。</p> <p>13日 蚕三眠に入る。</p> <p>14日 蚕四令に入る。</p> <p>16日 蚕四眠に入る(早い手)。</p> <p>17日 蚕四眠に大口が入る。</p> <p>19日 蚕五令に入る。</p> <p>24日 蚕も早いのが数匹出ただけで本日は終った。</p> <p>25日 蚕早口上簇に入る。遅口の方が調子が悪い。</p>	<p>5日 午前中は牛の床換え。</p> <p>30日 夕方から牛のつめ切り。</p>

月	米	麦	サツマイモ	豆類・その他野菜	養蚕	家畜
9月					26日 蚕も今日は大部かたづくと思ったが気温が下がったので予定より遅れた。 27日 今日蚕も半柵残して全部上簇。 28日 蚕も全部終わった。今年の晩秋蚕は調子が悪かった。	
10月	<p>2日 縄ない作業。</p> <p>3日 稲の葉色は良いが穂が傷んでいる様子。日が過ぎるに従い穂色は悪くなる。山の手刈取り7時間。</p> <p>6日 去年より稲もいくらか良い様である。母と2人で山の手へ刈取り。全部終える事が出来なかった。</p> <p>7日 午前中1人で昨日の山の手を稲刈りをかたづけた。母は角連寺の稲刈り。県道の西側を全部終えた。</p> <p>14日 午前縄ない。</p> <p>15日 午前中、沢田のすみの早植の刈り取り。</p> <p>16日 山の手脱穀。昨年よりは少し良いよう。午前中はまだよく乾いていない為何度か休み1日かかった。16日。</p> <p>17日 午後から角連寺の西だけ脱穀。5俵。</p> <p>18日 午前ドンドンの稲刈り。午後山の手、角連寺の籾摺り。9俵1斗位。籾摺り1時間。稲刈り3時間。</p> <p>19日 ドンドン沢田の稲刈りをした。</p> <p>20日 米出荷(9俵)。釜洞稲刈り。</p> <p>21日 母と2人で釜洞の残りをかたづけた。去年より面積が少なく2日で終わってしまった。</p> <p>23日 例年より寒くなるのが早く、稲も色をかけるのが早くなった。角連寺をかたづけ、天白をやりかけた。</p> <p>24日 天白の稲刈り。</p> <p>25日 稲刈り最中だが、今月中に12俵位供出したいので、ドンドン沢田の脱穀をした。良く乾いていたので早く終わった。沢田の苗代の刈取りとドブを刈った。沢田(苗代を除く)とドンドンは12、5俵。</p> <p>26日 今月中に十俵近く米の出荷がしたく、釜洞脱穀。昨年より場が少ないので早くかたづいた。天白稲刈り。母はドブ稲刈り。</p> <p>27日 秋の取り入れも今がたけなわ。ドブの田も半分以上刈った。仲々仕事ははかどらない。</p> <p>28日 俵にサン俵を付けただけで終わった。</p> <p>29日 午後から籾ヌカを入れる小屋を藁でかこって作った。母と祖父はドブの一昨日の残りを刈りに行った。</p> <p>30日 早く起きて籾摺り。今月中に出すと80円政府から奨励金が付くので午前中に組合迄持って行った。午後どぶの残りをかたづけ水門先をやりかけた。米出荷(14俵)。</p> <p>31日 彼女が手伝いに来てくれたので横枕を1日で終る事が出来た。</p>		<p>13日 サツマ芋を掘った。170貫。</p> <p>15日 午後から3人で新切へ芋掘りに行った。</p> <p>21日 サツマのツルをあげて来た。</p> <p>22日 新切のサツマと角連寺のサツマを全部掘った。</p> <p>26日 サツマ出荷。</p>		<p>3日 母は繭かき。</p> <p>4日 繭くり。</p> <p>5日 蚕も出て行ったので大掃除。</p> <p>収繭量 54k 200g 14貫 400(25g)</p>	<p>9日 午前中牛の床換え。</p>
11月	<p>1日 午前中に水門先だけ4人でかたづけた。午後から祖父と3人で柳田に行った。あと1反余に稲刈りもなった。4人稲刈り。</p> <p>2日 天気が下り坂になると言うので脱穀をした。天白を午前中にかたづけ、午後から角連寺をすます。</p> <p>3日 午前中は小雨の中、柳田の稲刈りをした。</p>	<p>8日 干し物もたまって居るので今日は新切へ麦蒔きに行った。</p> <p>9日 午前中新切畑の麦蒔く。今年は大麦にした。</p>			<p>17日 桑園の牧草蒔き。</p>	

枝下用水を生きる－「ある農家の日記」から－

月	米	麦	サツマイモ	豆類・その他野菜	養蚕	家畜	
11月	<p>4日 柳田を全部終る事が出来ず残ってしまった。雨水が貯って仕事が思うように出来ない。</p> <p>5日 午前中柳田稲刈り終り。今年も例年の収穫だろう。</p> <p>6日 籾もよく乾燥した。脱穀作業。水門先、沢田の苗代をこいで、ドブへ行って準備をして置いた。</p> <p>7日 ドブの脱穀。昨夕少し集めたので、ハザも整理出来た。今年ほとんどスズミを作らず積んで居るので楽である。</p> <p>9日 午後からは柳田の脱穀。</p> <p>10日 柳田の残りを雨の前にかたづけた。あと横枕だけ。</p> <p>11日 1日かかって日上がった籾を摺った。</p> <p>12日 今年も今日で脱穀も終り、秋の取り入れも一段楽しした。今日は横枕を1日ばかりでハザ迄かたづけて来た。</p> <p>15日 午前中柳田、水門先の田に石灰窒素散布。</p> <p>16日 午前中は籾種の選別。</p> <p>17日 午前中ハザを運ぶ。</p> <p>18日 柳田の田も水はけが悪くなり、今朝ひどい水。</p> <p>19日 籾摺りを終えてからの事であるが、前3回摺ったが意外に少なかったので今日も今迄の調子と思って居たが予想以上にあった。総数84俵。</p> <p>20日 午後からハザをかたづけ、その他色々のかたづけ。</p> <p>26日 俵結びをした。</p>	<p>14日 田麦をまく準備の為、ハザを運んだ。午後からは穴蒔きの準備。</p> <p>17日 午後から沢田の大根畑へ麦蒔き。</p> <p>18日 午後から水門先の麦田打ち、場だけ作った。</p> <p>20日 午前中、水門先で麦蒔き。</p> <p>23日 母は麦脱穀。</p>			<p>5日 午後からは新切へ堆肥を一杯持って行って豆をこいで来た。</p> <p>7日 大豆も抜いて置いてくる事が出来た。</p> <p>13日 天白の豆畑へ大豆を播種。午前中大豆をこいで過ぎ午後からは天白だけかたづけて1日過ぎてしまう。</p> <p>14日 午前中大豆こぎ。</p>		
12月	<p>1日 今日は仕事も4人でやったのではかどった。</p> <p>2日 農上り。</p> <p>13日 家の外のかたづけで新切へ下肥を運んで居て1日暮れてしまった。</p>					<p>5日 午前中は牛の床換え。厩過ぎ牛の取引をする話し。</p> <p>12日 肉牛のと殺について行って1日終る。見積り金額より2割以上も安くなりました。でも今迄手入れもしなかったし、飼料の方面も期間も短かったのが当然とあきらめる。</p> <p>14日 豚受精。</p> <p>29日 午後から豚の床換え。</p>	

ることに「ありがたみがつくづく思える」(1月6日)と感謝している。

この地区で農機をいち早く取り入れるのはT氏の家だったようで、1月15日の母との藁片付けにも動力トラクターを使っている。それは父不在の人手不足を埋めるためだったというが、人に代わる農機を周囲の農家も做うように揃えていった。

T氏は16日に大型自動車の運転免許を取り、運転手の口を期待し、翌日の仕事を断ってきってしまう。ところが連絡がない。2日後ようやく連絡が来たが、「なかなかいい仕事の所へは我々みたいな農業者はやとってくれない」(1月19日)と嘆いている。農業という生業があり、日雇いである以上、やりがいのある良い仕事には就けなかった。それでも仕事を失う不安は、当時の農業者が生業の農業だけでは暮らしにくいという弱い立場を示している。行けば収入になる賃労働は魅力的であった。

1月22日 このように出て家に居ることが少なくなると、毎年のことであるが本業と言うものから遠ざかってしまう気がして不安になってくる。ここで考えさせられるのが、これで自分と言うものが良いかと、これもまた不安になる。

本業は農業でありながら農業から離れている「不安」、本業をすべきではないのかという「不安」、ここからは農業は賃労働とは別物だという自負も読み取ることができる。モッコカツギの日も、「会社の仕事であるのでえらければ休んでやるので体には無理はしない」(1月23日)と、農業を休むことはできないのだという思いを記している。

「ゴミ集めみたいな仕事をしているとヒケメを感じる」(1月27日)、「朝から夕方迄同じ仕事をして居る事は仲々根気の居るものだ」(1月30日)と不満をこぼした。

1月は17日間、仕事に出ている。

## ② 2月

『農家日記』の年間予定の欄を見ると、1月から4月までは「出かせぎ」と記しているように、2月はほとんど農作業について記されていない。全く農作業がないわけではなく、祖父と母がこなしていたのである。

T氏は日々「仕事」に出かけた。仕事の内容は「チリ集め」・「割木作り」・「木工仕事」など、「他人がみれば笑うような仕事」(2月3日)であり、「毎日O社の仕事で時間から時間で終わってしまって、家の仕事は何もせず

飯を食べて寝るだけが家の日課になっている。今、自分と言うものが分からなくなってしまう」(2月4日)と嘆いている。

日雇いの賃労働への引け目もさることながら、自分でなければならない仕事があったとO社の仕事を休み、別の仕事に出かけた。「N君の代理でN社の車の運転手に行った。安城のS社の工場の仕事」(2月7日)である。工場では一日従業員の送迎の運転手を務めている。

その後O社の仕事に戻り、「薪作り」・「ブロック積み」・「コンクリート仕事」・「屋根のトタン張り」・「鑄造の台板の修正」・「芝生のサク作り」・「油くみ」・「浄化槽作り」等をこなした。「会社の仕事で大工仕事の丁張りとスミを出してみたがなかなか出来ない。何でも覚えておいた方が良いと思って自分でぼつぼつやって居た」(2月26日)と仕事への意欲を自分の中で見いだそうとしていた。

2月は23日間、仕事に出ている。

## ③ 3月

2日の水門先の除草は「今日は仕事を休んで」とあるが、2月末から風邪気味で、3月1日には朝から寝込んでいる。体調不良なのである。そのまま寝ていたいところだろうが、家族が農作業をする中、家で寝てはいらなかった。

3月も「仕事」に精を出した。「大工仕事」・「便所作り」・「鑄物工場の仕事」・「土掘り仕事」・「コンクリート仕事」・「浄化槽の間仕切り」等に出かけたのである。

3月16日 毎日々同じような仕事をしているより、我々が現在している仕事の方が小生の性分に合っている。現在自分というものが、どのような立場に立っているかが分かりにくく、又、これで結婚にたどりつけるかが心配である。

2月までのような不安は無くなり、「コンクリート仕事もやっていればおもしろい」(3月17日)、「大部なれて来たので楽に仕事出来る」(3月19日)と肯定的である。「暖かくなればそろそろ忙しくなってくる」(3月19日)と記しているように、本業の農業があることが思い出され、そのことが自分を支えているのだろうか。

22日は「夜は牛小屋作りで10時迄やって8分通り出来た」と記している。「仕事」から帰って夜遅くの作業は楽ではなかったろうが、家の者には「仕事」に出たことで技術を身につけたと証明する意味もあったろうし、翌日の青年会の慰安旅行に気持ちよく出かけたい気持ちも

あったろう。

旅行から帰った翌日は、「仕事を休もうと思ったが、遊んで来て置いて又家でぶらぶらして居ても家の者の手前悪いので仕事に行った」(3月26日)と記している。

間もなく自分の生業である農作業が始まるという思いからか、27日には「会社の仕事もあとわずかしか出られない。今月の暮れには苗代作りが待っている」と記し、30日にも「仕事に来るのもあとわずかである。来月になれば苗代を作らなければならない」と、苗代について繰り返し記している。出勤すれば収入になる賃労働とは違い、自分が何をすべきかを自分が決めねばならないのである。31日には「仕事」を休んで農作業を始めた。ここからが本業なのだという思いが伝わる。

3月は18日間、仕事に出ている。

#### ④ 4月

4月に入り農作業にかかりきりになるのかと思うと、「会社の仕事」は「浄化装置の間仕切り」・「倉庫の柵作り」・「アングルの仕事」・「箱直し作業」等、「朝から同じ仕事であったので気持ちの良い仕事が出来た」(4月5日)と記している。農作業が始まるからか、前向きである。

この年、T氏の家は養豚を始めた。6日、「今日は長い間の願と云うか、一度やってみたいと思って居た豚飼が今日より始まった」と記している。養豚を始めたのは賃労働とは別の現金収入となるからであろう。T氏は新たな農業経営を模索しているのである。

4月7日 今日会社の仕事。もうそろそろ仕事に出る事は出来なくなる。昨年は3月で仕事はやめているが今年はまだ出ている。その分は母がえらいと思う。でも小生も仕事に出るかたわら、自分も一生懸命でやっているつもりである。

「会社の仕事」は母の負担になっている。しかし自分も「一生懸命でやっている」という「やっている」は、農作業を指している。高度成長期にありながらも賃労働の優位に立つ農業の存在が見えてくる。

しかし実際はどうだったろう。「仕事に出るのもあとわずかの日数である」(4月9日)と名残惜しく、11日は「仕事」を休んで種蒔をしたが、「家の仕事をするとき間がどうしてもルーズになってしまう」と嘆いている。

「会社の仕事」を経験したことで、定時定刻ではすまない農事へのいらだちが出ている。

農作業は天候次第だが、会社に行けば仕事がある。

19日には、「今年は去年に比べれば家の仕事はあまりせず仕事に出て行ってしまふ。ぼつぼつ家の仕事に本腰をいれなければならない」と記している。T氏の「家の仕事」は農業である。「出て行ってしまふ」という表現には、家業の農業を優先させずに「仕事」に出ていることに対する申し訳なささを感じる。しかしそうでなくても家を空けることはあった。「今月は割と仕事に出た。今日で19日。何時もだと14、5日だが青年会の用がなくなっただけでも大部ちがう」(4月20日)と記している<sup>8)</sup>。後述するが、「会社の仕事」に出なくとも、青年会などのムラ事にお金や時間は割かれていたのである。

「会社の中の仕事に行くにも心配しながら行かねばならないようになって来た」(4月23日)と記しているように、農作業を始める時期が迫ってきた。「長い間出て居たので、明日から休みになると思うとなんだか心淋しい気もする」(4月25日)。

淋しく思うのは、「会社の仕事」がT氏の日常になってきたからだろう。と同時に、高度経済成長期にあって、冬の間の賃労働だけではすまない、恒常的な労働力が求められていたからだろう。もう1日と「仕事」に出るうちに、離農を選んだ者も多かったのではないだろうか。T氏は25日で「会社の仕事」を辞めた。

ところが26日は「朝は遅迄寝て居たが雨が降ったりやんだりして居たので一日遊んでしまった」。「今日のように何もせず家に居ると余分な事を考えてしまって農業と言うものに自信がなくなってしまいそう」と記している。農作業から離れていたため、農作業への意欲が出てこない。

27日からは「小さな田ばかりなのでくたびれる」と記しながらも、耕地を移動し農作業に明け暮れている。細分化された圃場は、圃場整備と同時に行われる交換分合などで減っていくことになるが、この頃はまだ時間効率の悪い時代であった。日記からも見えるように、耕耘機や牛を使って、田に合わせて農作業をするしかなかった。

30日、スキを壊してしまう。「最近は何でか今の自分のやっている仕事に自信がなくなってしまった。人のやっている事が良く見えて仕方がない」。春は農作業に自信が持てないでいる。

4月は19日間、仕事に出ている。

#### ⑤ 5月

2日は釜洞<sup>かまぼろ</sup>を耕す予定が、水が多く、「あまりにやわらかく」、横枕<sup>よこまくら</sup>へ移動している。この記録が昭和37年の田の水の状態を示す初めのものだが、水が入りやすい場

所と水がなかなか入らない場所があり、多くが天気次第だった。

3日は小さい田であったため、牛で耕している。農機が導入されても、耕地が機械を生かす大きさをもたず、労働力としてまだ牛は欠かせないものだった。

牛がT氏の家に労働力として登場するのは昭和11(1936)年のことである。当時の様子が昭和11年の父の『当用日記』に記されている。

昭和11年1月25日 今日夕方牛を買連れてきた。七拾六円也。前日、年の旧正月一日の事とて、今日牛を取りに行く。雨の降るのもかまわず、拾時に家畜市場へ行く。其れより仕度を致し帰るのが四時頃になり、余も相当に難儀を致し家へ帰る。牛も初めての事とて、心配致し飼育致して居るような次第である。

「午前中牛を見る」(1月28日)、「牛は来て丁度今日で四日になるが、ワラも思つたより食わず、風邪の気があるかしらと思つて居る。どじょうを掘ってきて食わして居る。一日に麩を八合位飼料として給與ス」(1月29日)、「牛の勢が悪し、心配致して居る。何となし牛を飼ふにつけて心配ばかり致して居て雑事に手がつかず。寒して風邪がひどくなるかしらと思ひ、卵酒を作る。吞ませるやら前記の如し薬を買ふて来るやらドージウを吞ませるやら、実に盡して居る」(1月31日)

初めての子育てのように牛の面倒を見ている。2月には牛小屋を造り、3月22日からは「牛の田打練習」を始める。慣れないのは牛だけでなく、練習する側も疲れた。1ヶ月後の4月22日、「水の落ちる田を二ツ牛で起し、ドンドン(地名)上の南を起す」とあり、このあと牛は大切な労働力となる。

昭和37年に戻ろう。4日・5日は天気が悪く、「会社の仕事」を頼まれて出かけていくが、「家の仕事を放って出て行くと落ち付いて仕事はやってられない」。そのため、この後は「会社の仕事」に出かけていない。

8日には春蚕が始まった。豊田市の養蚕は盛んで、畑地は桑園として利用され、多くの養蚕農家があった。ところが高度経済成長期の農工間所得格差の拡大につれて、生産性の低い養蚕はこの頃衰退に向かっている。

豊田市の養蚕の推移を見てみると、昭和25(1950)年の養蚕農家は1,458戸で養蚕農家率は13.3%、10年後の昭和35(1960)年の養蚕農家は1,325戸で養蚕農家率は12.5%と緩やかな減少だが、その10年後の昭和45

(1970)年の養蚕農家は382戸で養蚕農家率は4.0%と大きく減少している。日記の中でも「蚕も家の中で人間と一緒にでは家の中が汚れてやりきれない。来年はもっと外へ出す予定である」(6月1日)というように、継続を考えながらも大きな投資までは考えておらず、T氏の家を含めてその後の養蚕については間もなく選択を迫られる時期にあった(豊田市教育委員会・豊田市史編さん専門委員会, 1977)。

各家庭での養蚕の作業まで、蚕は共同飼育場で育てられていたようで、8日に母は西山の飼育場で掃立を行っており、12日には祖父も共同飼育場に出ている。T氏は養蚕を母に委ねていたようで、作業工程の詳細は日記から読み取ることができず、自身の蚕に関する作業は「手伝い」と記している。

14日、「今年も去年同様砂が入り、次第に田が小さくなって行く。今日は土を出してアゼを下の田2枚塗ったきりである」とある。雨水がはげず、苦労していることがわかる。農作業は天気次第であった。ようやく晴れ、続きの作業をと思つても、雨水がすべて水路に入り、満水のこともあった(5月16日)。そのため、常に点在する田の様子に目配りしながら移動している。

「ぼつぼつ山田の田植えをする時期になったが、今年機械で出来るという頭があるせいか、ゆっくりと構えているので、まだアゼを塗って場をだいたいならしただけである」(5月22日)とあるように、T氏の家では昭和37年、田植え機を購入している。同年4月号の『農業あいち』で、「もうすぐできる 人手をかけない稲作り一連の機械」として田植え機を紹介していることから(狩野秀男, 1962)、同一のものと確認はとれないものの、T氏の家での農機の導入は全般に早い。しかし「今年初めての機械であるので思ったより仕事が出来なかった」(5月23日)と記しているように、農機は慣れるのにも時間がかかった。

24日、田植えが始まり、初日は叔父、叔母、母と自分が入り、計4人の作業であった。25日は叔母と2人、27日は1人である。一気に終えることができないのは、並行して春蚕があるからである。人手が欲しい時にはT氏の婚約者が泊まりがけで来て、感謝している様子も見える(5月29日)。父不在のT氏の家は人手の確保に苦労しており、田植えや稲刈りといった繁忙期に、婚約者は既に貴重な労働力であった。

5月は2日間、仕事に出かけている。農作業に追われながら、5月の総括欄に「今月と言う月は、毎年の事ではあるが仕事になれないせいか、月の始めは落付いて仕

事が出来ない。今思うと不思議である」と記し、「雇用労働も馬鹿にはならないのでもっと考える事にする」と記している。月の終わりには仕事にも慣れ、落ち着いて仕事をしているが、この切り替えは難しく、賃労働についても記すあたりは現金収入の必要性を感じているのだろう。

#### ⑥ 6月

6月は農作業が忙しく、「会社の仕事」に出かけて行くことはなかった。水田ではPCP農薬散布が始まった。新農薬の開発がすすみ、次々と導入されていった頃である。

農作業は次から次へと終わりがなく、11日の半日は春蚕の繭渡し「手伝い」をしているが、午後からは沢田の田植をしている。15日は3人でドブ（地名）で田植えをした。「一日中腰を曲げて居ると夕方にはどうにもならなくなってしまう」というドブでの田植えは3人で延べ27時間、2反の田が精一杯だったという。全国稲作作業別労働時間を見れば、田植えの全国平均労働時間は昭和35年で10aあたり26.6時間、2反であれば53.2時間となる（農林水産省 農業経営統計調査）。まだ田植え機は使いこなされていないのだろうが、全国平均からすれば決して苦勞の多いところではないにしても、T氏が父の時代は1日1反の手植えの田植えが、この頃には二条苗田植え機がでて1時間1反になったと話すことから考えれば、この日の田植えはだいぶ苦勞したことがわかる。

#### ⑦ 7月

17日、「家の仕事もあらかたきりがついた」として「M様の仕事」に行っている。続いて「農協の麦運び」が始まった。T氏は「仕事」から帰宅しても「沢田の稲に消毒、大麦の選別」と農作業を行っている。真夏の麦運びは「これも小使錢欲しさで行くのであるが全くつらい」（7月31日）と記している。

7月は1日が「M様の仕事」に出て、あとの8日間を農協の麦運びに出た。

#### ⑧ 8月

農協の麦運びは9日まで続き、7月の分と合わせて15日間出たことになる。

10日には「本日どぶの田の水揚水を行った」とある。6月には水が多くて難儀したドブという場所は、揚水して水を引かねばならないほど水がなかった。T氏の話では、叔母の嫁ぎ先が千足せんぞくという場所で土木業を営んでお

り、そこから揚水機を借りてきて揚水を行ったということである。8月は養蚕と稲の追肥を行う大変な忙しさで、婚約者が養蚕の手伝いに泊まりがけ来てくれると、T氏は蚕の「手伝い」から解放され稲の追肥に行くことができるかと歓迎した。

24日、「長い間雨も降らず里の田は白くなって居るので、今日は従兄弟と一緒に道具をかりて来て揚水をした。今度は周囲のものに話しをしてやった」とある。前回のドブでの揚水は自分の田だけだったが、里の田は他でも困っているのが明らかだったのだろう。こんな機械を使えば良いと周囲の農家に説明したと思われる。

当時、揚水して田に水を流す方法は土地改良区でもあちこちで行われていた。昭和43（1968）年の枝下用水土地改良区設立時には、枝下用水の受益地には幹線支線に20ヶ所もの揚水場が確認できる。それでも水の問題が解決したわけではなかった。揚水場ができてもお水けんか・水争いはあった。T氏の地域は枝下用水の幹線部にあたり、水は無いわけではなかったが、田まで適量の水を引いてくるのは大変だったようである。その時にはT氏のように、個人の工夫も各所で行われていたことだろう。

T氏は8月総括の欄に、「現在の小生の心鏡は又冬時に戻って来た。と言ってわずかな期間を仕事にでる事が出来ず迷う分けである」と記している。T氏は再び農業か賃労働かと迷っているようである。

#### ⑨ 9月

1日、「祖父と母は蚕の講話」を受け、4日には晩秋蚕掃立、5日は子牛が生まれと多様な農作業に明け暮れる。

7日、「今年も稲の作柄は大体決った様なものである。田一面を見ると穂は良いように見えるが、中へ入って見ると肥が少なかった様である。「どうしても思う様にならない」稲作に、まだ自信をもつことができない。

10日には「今迄は自分勝手な事をして来たがもっと家の者が助け合わねばと思った。12月からはそうであろう。今から心掛けておかねばならない」と記している。「自分勝手な事をして来た」の中には賃労働に出かけることも含まれているのだろうか。「もっと家の者が助け合わねば」とは農作業のことだろう。12月の結婚を意識しての発言である。結婚し、一戸前となれば、今までのように会社の仕事に出ることはできないと考えたからであろうか。

12日は「昨年は今時分仕事に出て居た。今年は家に居るので細かい所迄目が届く」と記し、14日は「蚕も

四令に入り忙がしくなる。今迄は母一人でやって居たので小生手を出さなかったが、今からはそうもいかない。夏場は仕事に出る日があるようであるが、蚕が居ては続ける事が出来ないのでも小生も考える」と記している。実際にはこの家では昭和45年頃に養蚕から手を引くが、もともと養蚕に消極的だったT氏はこの時どのように考えたのだろうか。

#### ⑩ 10月

1日、「先月は蚕で今月からは稲の刈取りで忙がし忙がしで一年、一生は暮れて行く。我々農民の相言葉、この言葉に楽しさを持てる様にしたい」で始まる10月、稲刈りとこの年3回目の蚕が終わった。

祭りの終わった12日、「朝、小坂のA様の宅へ豚舎の相談に行った所、現在小生の思っている豚舎や蚕室ではダメだと言われた。先の事を計画してやれとの事」。大規模経営に向けた示唆があったのかもしれない。

25日からは脱穀を今月中にと早く記述が並ぶ。「母と2人で、祖父が少しづつ手伝うだけではなかなか仕事ははかどらない」（10月27日）と嘆きながら、「今月中に出すと80円政府からの奨励金が付く」（10月30日）のであった。奨励金とは閣議決定される米の政府買入価格の早期供出奨励金のことである。31日には「今日彼女が手伝いに来てくれたので横枕を一日で終る事が出来た」と安堵している。

10月も仕事にはでていない。

#### ⑪ 11月

12日で脱穀が終了し、13日、麦を蒔くはずだった「小さな畑を移動させる予定」として蒔くのをやめる。

18日、「柳田の田も水はけが悪くなり、今朝あたりひどい水である。その為に仕事も出来ず、半日すんでしまった」とある。雨で水がたまり、作業ができないのである。

21日、「今日から仕事に出掛けた。今年は千足の方の仕事であって遠いが難である」と記している。朝が早く、「牛の餌や豚の餌を与える事が出来ない」（11月22日）と心配するが、それ以上に気がかりなのは祖父の態度であった。「家の中がどうも悪い感じである。麦もまかず仕事に出て行くのが祖父には気に入らないのであろう」（11月25日）とある。祖父は農作業に専念せず、無責任に出て行くと捉えているようである。T氏から見れば、日々の生活にはこの現金収入が欠かせないのであるという思いであろう。世代の賃労働の捉え方の違いは父の代を挟んでいないだけ大きなものだったと思われる。それ

でも2ヶ月振りの「仕事」は続いた。

26日、「昨年迄の仕事の要領とは全くちがう。本格的な土木工事であるので昨日の型枠でも叔父が手直しをしてコンクリートを流し込んだ。午後からは家迄車で送ってもらった」。どうやらこれまでの日雇いの「会社の仕事」とは異なり、揚水機を借りた土木業を営む叔父のところで仕事をしているようである。本格的な土木工事は要領を得ないが、「雨が降り出し仕事を中止。車を借りて帰って来る」（11月28日）など待遇はよく、「自分の気質として出かけたら続けたい」（11月29日）と、11月は叔父の土方仕事に9日間出かけている。

#### ⑫ 12月

2日、農上りである。それでも牛や豚は餌やりや日々の管理を休むことができず、出産から屠殺や最後の取引まで、すべてこなした。当時は枝下用水幹線の流れる平芝に屠殺場があり、その汚水は枝下用水に流されていた。平日は血で用水が赤く染まったという。

千足の叔父のところは「毎日コンクリート仕事で体にはえらいが、仕事が覚わるので務めている」（12月3日）とある。7日には「仕事も次第に慣れてきた。千足の方の話し具合だともっと仕事をするかと思って居たがそれほどでもなかった」と記し、頼まれた仕事だったのである。11日まで続けている。

15日に結婚式をおこない、新婚旅行を経て、22日からは「S様の仕事に行く」。23日から28日までの6日間を「仕事」に出かけた。

12月の仕事は叔父の土方仕事を8日間、「S様の仕事」に7日間出ている。

以上、本章では『農家日記』に見る昭和37年の農作業と賃労働を、月毎に読み進めてきた。1年を通して多様な農作業があるだけでなく、多くの時間を賃労働に費やしていることがわかってきた。1年を通して6月の田植えの時期、9月、10月の稲刈りの時期を除き、毎月「仕事」にでている。その日数を計算すると、年間で会社の仕事に80日、農協の仕事に15日、叔父の仕事に17日、他に7日の合計119日に及ぶことがわかった。約1年の3分の1を農作業以外の「仕事」に出ていたのである。

その賃労働がこの農家の収入とどれほどの比率になるかは不明だが、少なくともこの日記から見るこの農家の形態は既に専業農家ではない。すなわちここには、クニ事としての農業人口の工業労働力への転換という事態が示されていると考えることができる。それは、イエ事＝

クニ事として完全に一致していた昭和11年当時の日記と比較すると如実にあらわれる相違点でもある。

それでもなおT氏が専業農家だと話すのはなぜだろうか。そこには賃労働に費やす日数やその収入といった数値だけでは推し量ることのできない日々の暮らしの中での自身の拠り所があるのではないだろうか。次章では開削者祭祀や村祭りなどの記録を追いながら、そこにイエ事とクニ事の媒介項としてのムラ事の姿をうきぼりにしてみたい。

#### 4、ある農家の昭和37年の交際

前章ではT氏の多様な農作業と賃労働という労働記録に注目してきたが、1年の暮らしは労働ばかりではなく、日記には娯楽や交際といったムラ事も多く見える。本章ではこの農家の昭和37年の交際について取り上げていきたい。

1月4日、「母は養蚕組合で伊勢参り」とある。T氏も新年から猿投農林高校同窓生と忘年会兼新年会（1月1日）があったが、自営者懇談会も催されていた。

1月24日 高校時代の友人と話し合うと自分と言う者がどのような立場に置かれて居るかがよく分かる。今日も高校の自営者懇談会に行つてその後で色々話をすれば、小生は平凡に毎日を送つて居るようだ。今日は懇談会に行つて、今後の我が家の経営内容は一変したい気持ちになった。

8月21日には「猿農高卒の自営者の懇談会で視察に行った」ともあり、T氏は同級生よりも早く農家経営を考えねばならなかったため、こうした集まりは貴重な機会であつたらう。

T氏は1月8日からの青年会の活動にも役員として熱心に取り組んだ。3月4日の青年会の演劇発表会が終わると役員も交代、農作業に専念できる。T氏は「青年会で金銭的には損をしたのは確かだが、人間が成長したことは利益があつたと思う」（4月20日）と記している。しかし、青年会の来年度役員がまとまらず「現存の青年会の曲り角に来た為か？」（3月15日）とも記している。会社勤めが増えてきた同世代にとって、ムラ事が負担になってきた頃だろう。

市青協の活動では、冬はスキー講座、夏は登山にかけた。福利厚生についてもこの頃始まつてきたのだろう。1月7日、市消防団の出初式があり、消防団の活動もは

じまつている。「小生は今年が初めてであるのでどんなものであるかと楽しみであつたが町通りを歩いて居る感じは良いものではなかつた」と記している。消防団は米集めの仕事もあつたが、遊びの要素も大きかつた。12月26日には夜警を行っているように、ムラ事は受け継がれていった。

4月18日、「祖父は明治神社の用件で出て行つた」とある。明治神社とは明治川神社のことで、明治用水土地改良区の管理する明治用水開削者が祀られた神社である。この日は例大祭で、明治用水始水式でもあつた。

枝下用水は明治用水の後に作られた用水だが、大正15（1926）年に明治用水普通水利組合と枝下用水普通水利組合が合併したため、枝下用水開削者の西澤真蔵も明治川神社境内にある伊佐男勲神社に合祀され、その後、明治川神社に合祀された。祖父は当時明治用水土地改良区のこの地域の役員をしていたようで、T氏の遠い記憶に、祖父が自転車で初穂を神社に届けに行く姿があるという。

祭りについても記しておこう。10月10日の祭りには、前日から「その準備に大童、毎年のことであるが何から手につけて良いか分からない」（10月9日）と記していたが、この年は祭りも婚約者が手伝いに来てくれた。これでムラ事もこなして行けそうだ。

その後は婚約者や叔母のいる祭りに出かけているが、豊田市の挙母祭りの日には農作業をしようと決意する。挙母祭り前日、「去年と違って高校の連中との祭礼の交際を少なくしたら体に楽である。その変り農作業の方がいつもの年より早くなつた」（10月17日）と記し、祭りの日には、「4、5年前では挙母祭りと言うと村の祭りの様にして遊んで居たが、今迄では稲の刈り取りでそうはしておれないようになった」（10月18日）と記した。間もなく一戸前の自分は、もう高校生のようにはしてられないのだというのである。

その他にも「母は昨日農機屋の招待で東京、熱海方面へ旅行」（3月9日）や、「祖父は農協の招待で名古屋へ」（7月1日）、「母は昼から慰霊祭に参列」（11月1日）、「母は名古屋、祖父は鴛鴨、各々法要に」（12月2日）という具合に、祖父や母が一家を代表して出かけていく姿が見える。前年に成人式を迎えたT氏はまだ一戸前として扱われておらず、ムラ事に一家を代表して出かけることはなかつた。

5月10日、「今朝、母は村の人と西沢山へ参りに行つた」とある。西澤講であろう。枝下用水開削者西澤真蔵の菩提寺である瓦屋禅寺のある山へ出かけたのである。昭和

26 (1951) 年、T氏の祖父たち枝下用水受益者は、泊まりがけで瓦屋禅寺に西澤真蔵顕彰碑を建立している。

T氏の暮らす下林地区は、現在も西澤講が続いている<sup>9)</sup>。西澤講を組む34戸の構成員は、高齢化により現在は西澤山行きを省略し、近くの善宿寺の西澤真蔵碑の前で読経してもらい、公民館で食事を用意して待つ人たちのところに報告に行く。そこで会食を楽しむのが通例である。昭和37年の頃は西澤山から帰ってくる人をみなで善宿寺で待ち、全員で西澤真蔵碑を参り、お堂で食事を取ったという。

西澤講を組む34戸は、もともとはみな農家であったが、今では「専業農家」はT氏の家だけとなり、兼業農家はもちろん、離農して耕地がない家もある。既に用水に感謝する必要が無い者がほとんどである。そのため平成23 (2011) 年度に講が一巡した時、継続するか否かを話し合ったという。その結果、もう一巡が始まった。やめるのは簡単だが、2度とできないだろうということ、田畑はないが、かつてのこのつながりを大切にしたいという声が上がったのである。講の主催は下林自治区、旧村民を繋げる唯一の場にもなっている。

このムラ事の性格をめぐって、ここでこれ以上資料を重ねる準備はないが、戦後農業の変容を考える上できわめて重要な位置を占めると考える。ムラ事は、イエ事に近い位置から生活実感を支えているだけではなく、クニ事の受け皿ともなり得たのである。と同時に、イエ事とクニ事が直接双方向的にリンクするような事態も生じてくる。そのことをほりさげるために、以下では、国家政策としての労働力人口の移行や農業の合理化の時代の「三ちゃん農業」という一大スローガンの実態を日記から読み解いていきたい。

## 5、「三ちゃん農業」を働きに出る立場から

働き手の父ちゃんが不在で、爺ちゃん・婆ちゃん・母ちゃんだけとする農家経営の状況をさす「三ちゃん農業」という言葉は、新聞が報道し、昭和38年には国会でも使われる流行語となった。この言葉に帰着するまでも、前述の愛知農業普及協会発行の月刊誌『農業あいち』9月号では「かあちゃん農業のいいぶん」と題した座談会が掲載されるなど、視点は残された家族に向けられたものだった。月刊誌『農業あいち』の昭和37年の1年間の全表紙が女性農業者の農作業の写真で飾られていることも、新たに期待する労働者像を示している。

本稿では昭和37年の農家日記から、いかに多様な農作

業をこなして行かねばならなかったか、その時にどのように水が必要とされたか、それは十分間にあったのか、そうした農作業の分類を始めた。

ところが読み進めていくと、T氏は1年365日のうち119日、3分の1を賃労働に出ていることが明らかとなった。これまで見てきたように、日々の日記から見えてくる様子はこれまで「三ちゃん農業」として示された農家経営の姿と実態が大きく違っているのではないだろうか。出かけた先の日々の仕事のその内容は、臨時の日雇いの形態である限り、決してやりがいのある仕事ではなかった。休日も関係なく、農業一筋で生きてきた祖父からは、農業をしないうで「仕事」に出かけて行くことに理解ない態度を示されてもいた。

そうまでして「仕事」に出で行かなければならなかったのはなぜだろうか。1つは高度経済成長の中、加速度的に日々の生活が変わり、すぐに現金にならない農業だけでは暮らしていくことができず、賃労働を選ばざるをえなかったという理由があるだろう。現金収入の魅力は非常に大きかった。しかしそれだけではないだろう。昭和37年6月、トヨタ自工は創業以来生産累計100万台の記録を樹立している。これは日本で初めてのことであった。内閣総理大臣や多くの関係者を招いて100万台達成記念式典が行われたという(トヨタ自動車株式会社、1987)。こうした気運の中で、自分が日雇いでもイエから解放され、日々働きにでることには大きな魅力もあったことだろう。

とはいうものの、この時代の大きな変化の中で、農業に生きてきた世代は、これまでの本業である農業をおろそかにしてまで「仕事」に出で行くことに納得できなかったに違いない。だからこそT氏はできる限りの農作業の責任を果たしながら、それでも賃労働に出で行ったのであろう。

ここで昭和11年の父の日記と比較してみよう。昭和12 (1937) 年のトヨタ自動車工業株式会社設立に向けて、父もまた農作業以外の「仕事」に出かけている。「今日は前山、豊田仕事1人」(4月5日)、「今日は2時半に仕事の終りである。本当に有難い様なことである」(同)とある。前山は後のトヨタ町に隣接する地域で、数日務めた後に「今日迄に七円拾銭仕事方より貰受」(4月16日)とある。

年末にも「今日より前山、豊田工事敷地の道路、三栄組工場に行く。初日」(12月29日)とあり、日記で見える限り、年間16日間トヨタ関連の「仕事」にでていたことがわかった。

しかも、この年が初めてではないらしい。「昨年は大分土方仕事工区の仕事に出た。今年は仕事に出られず、家の仕事に目を廻して居る」(2月2日)と記している。日数はわずかとはいへ、この地域では昭和11年にも、既に農業の傍ら土木工事などの「仕事」があったのである。ムラ事も多かった。「学校の尊徳石像台を作りに行く」(1月5日)、「通学道路の除雪作業」(2月1日)といった学校の出役もその1つだが、「用水工事初まる」(6月9日)、「耕地整理工事、隧道工事に1人出役」(10月23日)といった記録もある。どうやら用水工事は父(T氏の祖父)の出番らしく、父が出て行ったと記している。

「毎日三人で田へ出て居れば思ひの外仕事が出る」(11月2日)とは、稲刈りの多忙期になかなか家族総出でできないことを記したもので、「今年は何につけても一人で何事も行うので根気よく働くのである」(3月15日)と覚悟している。

しかしこれらの作業に時間をかけても、父の農業への思いには揺らぎがない。「人生五十年と(いう)が、余は今半生を送りし。一人農業に従事致して居る身であり、とは言へ自分の職業に対しては十分理解を持ち、強い信念のもとに精進致し度い」(3月29日)とし、「我々はやはり農業者である。一日を意義ある様に送り真の農業者なる事に心掛けて居る」(4月1日)と力強く記すのであった。

さて高度経済成長期の昭和37年、日々の暮らしは着々と変化を見せていた。父がこの年まで生きていたら、間違いなく会社勤めをしていたらとT氏は当時を振り返るが、祖父から亡き父の後、この家を継ぐことを言い聞かせられ、この家とこの家の農業を継ぐこと以外に選択肢はなかった。

高度経済成長の中で、次男以降が賃金労働者へと進むのは当たり前になってきた。それでも長男は家を継ぎ、農業を継いで行かねばならなかった。しかし昭和37年はその後継ぎもまた、外に働きに出だした時でもあった。家経営のためにも農家経営のためにも、より効率的に進めていくための現金収入が必要だったのである。

T氏はこのとき、農業を選ぶか離農するかと悩んでいたのではない。農業を選びながらも、明らかに農工間格差が大きくなっていく中、実質農業以外の収入を得ながら、家経営と農家経営を切り離すことのできないことに、時に迷い、不安を感じ、苦悩していたのである。

本章での資料提示からわかるのは、T氏の父の時代である昭和11年においても、賃労働は重要な意味をもっていたし、逆に「三ちゃん農業」が喧伝される高度経済成

長にあっても、それは離農を強いるようなファクターでは必ずしもなかったということである。「三ちゃん農業」におけるもうひとつの視点は、実質面では恒常的な仕事と変わらないほどに農業以外の仕事をしながら、いかに農業で生きるかを模索し続ける後継者の姿でもあった。

## 6, まとめ

本稿では枝下用水幹線の受益地である豊田市の昭和37年のある農家の日記を通して、多様な農作業をとまなう生業としての農業と、現金収入を得るべく農業以外の仕事にも取り組むこの地域の特徴的な農家経営を見てきた。

日記にはT氏の日々の苦悩が如実に表れている。農業を継ぐことに迷いは無かったが、農業を主としながら外で働くことで、農事から離れている自分に自信をなくしたり、逆に楽しんだり、1年を通して思いが揺れる姿が描かれた。それは高度経済成長という大きな生活の変化があった時期であったこともさることながら、昭和37年がT氏の結婚の年だったことも大きいと思われる。一人前にはなったが、これから一戸前として一家を背負う立場になった時、どのように生きていったらいいのか。それはT氏個人の問題ではなく、この家の農家経営と農業経営の問題であった。

それを確信するのは父の昭和11年の日記である。農家経営がそのまま農業経営であることが迷いなく自身に受け継がれる時代、日本の食糧増産の流れの中では農業の日々の暮らしに迷いや不安は無く、日雇いの現金収入に素直にありがたいと喜ぶことができるのである。

昭和37年はその現金収入はもっと切実なものであったろう。それでも農業を続けることができたのは、農業以外の働く場が身近にあるという環境があり、そこで現金を得て、養豚や牛などの飼育を手がける運営資金とすることが可能となったからである。日雇いの立場で低賃金で働く人々の中には離農してしまう人も多く、地域の重工業はそうした人々を臨時雇用することで安価な労働力を手に入れてもきた。こうした流れの中で農業はこれまでの農業ではいけないのだと、政府は縮小できるものは縮小させ、生き残れる農業は選択的拡大というかたちで進めていく。

T氏には農業か離農かの選択の余地がなかったという言い方は、言い方を変えれば生きていく農業の環境が十分整っていたからだとも言える。また豊田市全体で言えるのは、その選択を迫られること無く、耕作地を減らし

はしても農家という形態を持ち続けることが、通勤兼業で可能であったことである。昭和37年は、これまで長く農家経営と農業経営を一体としてきた農民意識が、家経営と農家経営とを分離する生活者意識へと変動していく時期にあったということができらる。

本稿では昭和37年という限定された農家日記を分析の対象としたため、高度経済成長と農業基本法によるその後の生活の変化にまでは迫ることはできなかったが、最後にT氏の現在について記しておきたい。

T氏の家は現在も昭和37年当時と変わらぬ耕地を所有し、農業を続けている。それでも大きく経営形態を変えた。T氏は耕作地を基本的に農事組合法人に預けている。その上でこの法人で自身が働く形をとっているのである。農業の後継者と高齢化の問題は切実である。いつ自分が農業を続けていくことができなくなっても、これからも自分の田畑が変わらず耕されていくよう、それが可能な方法をとったのである。

平成23(2011)年、この農事組合法人では72haもの水田を1日2～9人の組合員で請負った。T氏の長年の農業で培った知識と勤がこの実践の場で生かされている。全国でも先駆的なこの地域の集団営農は、かつて兼業化の流れの中で、集団での蚕の共同飼育も試みられたものの、工業への労働力の集中で達成できず、成功することができなかったものと同様の試みと見ることもできらる(豊田市教育委員会・豊田市史編さん専門委員会, 1977)<sup>10)</sup>。

農家経営＝農業経営であるがゆえに、農家に生まれた長男は跡継ぎとなり家と土地を継承することが当然の規範とされた時期の昭和11年の日記をレファレンスとして、その規範が激しく揺れ動き葛藤するT氏の日記からその時期の農家経営の姿を読み取ってきた。そこから読み取れるのは、農家経営の揺れだけではない。兼業化を支えるためには農業労働そのものが軽減されなければならない、それを支えるために農業技術、圃場の整備、水の管理などがこのあと大きく動き始めるのである。

本稿では触れなかったが、この時期まだ明治用土地改良区の管理下にあった枝下用水は用水路の全面再改修が切望されており、昭和39年から県営かんがい排水事業が始まる。しかし明治用土地改良区から受益面積比で配分される事業費では工事が進まず、工場誘致を進めていきたい豊田市は、この事業費負担を申し入れる形で明治用土地改良区からの分離を呼びかけ、昭和43年に枝下用水土地改良区が設立する。

昭和37年のこの日記が書かれた時期の農家経営の揺

らぎは、こうしたその後の大きな動きと密接に関連しているのである。

## 謝辞

本稿は2008年度より取り組んでいる豊田土地改良区・枝下用水120年史編集委員会と豊田市矢作川研究所との調査研究成果の一部である。

本稿執筆にあたり、繰り返しインタビューに対応してくださった鈴木寿伸さん・澄代さんご夫妻をはじめ、豊田土地改良区関係者のみなさまに深く感謝します。

また枝下用水120年史編集委員会のみなさんとの頻繁な議論によって、資料の解釈が可能になりました。ここに記して感謝します。

## 注

- 1) 小麦粉を水で溶いて焼いたもの。当時は疎開してきた人が隣に住んで居り、少年の家事を手伝ってくれたという。
- 2) 2011年7月14日の鈴木寿伸氏への聞き取りによる。
- 3) 月刊誌『農業あいち』は愛知農業普及協会が昭和30年9月から発行していた月刊誌『農業普及』と『農芸』とを合併して発行され、平成17年12月まで続いた。
- 4) 2011年7月14日の鈴木寿伸氏への聞き取りによる。
- 5) 『矢作川資料研究第3集枝下用水120年史資料集その2』では稲作についてのみ追ってきたが、農作業一覧表では、米・麦・サツマイモ・豆類その他野菜・養蚕・家畜で分類した。
- 6) 日記には社名等が具体的に記されているが、本稿では伏せた。
- 7) 2012年12月26日の三浦孝司氏への聞き取りによる。
- 8) 「今日で19日」とあるが、日記を見る限りでは、この日までの勤務日数は13日である。8時間勤務体勢の中、日給等をどのように計算していたかは未調査である。
- 9) 2009年・2010年と枝下用水120年史編集委員が西澤講当日に調査を行った。
- 10) 豊田市では中甲、若竹、逢妻、柞塚会という農業法人(農事組合法人)があり、地域を分けて活動している。T氏の勤める逢妻は稲作72haだが、他に麦も豆も耕作している。中甲は200町歩を超え株式会社になっている。

## 引用文献

- 愛知農業普及協会（1962）農業あいち，1，：10.
- 狩野秀男（1962）もうすぐできる 人手をかけない稲作り一連の機械. 農業あいち，4：48-50.
- 枝下用水120年史編集委員会（2013）矢作川資料研究第3集枝下用水120年史資料集その2，豊田土地改良区，愛知：28，75.
- 豊田市教育委員会・豊田市史編さん専門委員会（1977）豊田市史4巻（現代），豊田市：427，559.
- トヨタ自動車株式会社（1987）創造限りなくトヨタ自動車50年史：378-379.

豊田市矢作川研究所：  
〒471-0025 愛知県豊田市西町2-19